雪の奇跡

丘澄絵梨奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪の奇跡

【Ｎコード】
Ｎ７４６２Ｆ

【作者名】
丘澄絵梨奈

【あらすじ】
クリスマスの前夜。ハリーは不思議な夢を見た。夢から覚めたハリーは、ヴォルデモートの罠ではないかと心配になり、ルーピンに相談する。ルーピンはそんなハリーに魔法界に伝わる、ある言い伝えがあることを話す。

「不思議な夢」

クリスマス前夜。
ハリーは不思議な夢を見た。
神秘部のベールのアーチ。
そこに背の高い誰かが立っている。
「誰…？」
ハリーがそうつぶやいたとき、現実に引き戻された。
（いったい、何だろう？　まさかまた、ヴォルデモートが僕をおびき出すために…）
ハリーは額の傷に手を当てた。　だが、傷が痛んでいる様子はない。

翌朝。
「やあ、ハリー。おはよう」
アーサーが声をかける。
「おはようございます」
「おはよう。よく眠れた？」
「ええ。何とか…」
ハリーはそういって食卓につくと、朝食を食べ始めた。
不死鳥の騎士団のメンバーも数人集まっていて、にぎやかな食事となった。

「ルーピン先生」
朝食後、ハリーはルーピンに声をかけた。
「なんだい？」
「話があるんです」
ルーピンはハリーと共に別室へとうつった。

「何かな？　ハリー」
ハリーは昨夜見た不思議な夢のことを彼に話した。
「ヴォルデモートがまた僕をおびき出すために見せているんじゃないかって思ったけど、どうも違うみたいで…」
「今日はクリスマスイブだからね。君が夢を見たのは昨夜なんだね？」
「はい」
「もしかしたらその夢は、今日のことと何か関係があるかもしれない。ハリー、魔法界にはこんな言い伝えがあるんだよ。『聖なるイブの夜にスノー・エンジェルが奇跡を起こしてくれる』。もう少し夢の内容を聞かせてくれるかな？」
「神秘部にあるアーチの前に、人が立っていたんです」
「アーチって、あのベールのかい？」
ハリーはうなずいた。
「男性か女性かは？」
「そこまでは…。でも背が高かったから、男の人かなって思ったんだけど…」
「そうか。今夜一緒にそこへ行こう。何かわかるかもしれないから」
「でも…もしも、ヴォルデモートの罠だったら…」
ハリーは不安を隠せなかった。　1年前の戦いでヴォルデモートの偽の夢に惑わされ、家族とも呼べるべき存在を失ってしまったからである。
「大丈夫だよ。そうなったときのために、騎士団のメンバーに知らせる手段は持っているから」
ルーピンはハリーを励ますように言った。

その夜。
ハリーはルーピンと共に魔法省の神秘部へと向かった。
神秘部内では不思議な現象が起きていた。

スノー・エンジェルたちが舞い踊っている。
「どうやら言い伝えは本当だったようだね。行こう」
ルーピンはハリーを促し、さらに先へ進んだ。
そして、ハリーが夢で見たアーチへとやってきた。
「ここです」
「人が立っている気配は…　ん？」
その後ろ姿を見て、ルーピンは息をのんだ。
「ハリー！」
ルーピンに声をかけられ、ハリーはアーチを見つめた。
アーチの前に立っていたのは、2人がよく知っている人物だった。
「よかった。私の夢が届いたようだね」
そういって、その人は振り向いた。
1年前にこの場所で命を落としたハリーの名付け親――シリウス・ブラックだった。

「雪の奇跡」

「シリウス…！」
言葉を失ったハリーにかわって、ルーピンが叫んだ。
「リーマス…」
シリウスの表情が明るくなった。
「すまない。君を助けることができなくて…」
その言葉に、シリウスは首を振った。
「誰にも責任はないさ。　ハリー…」
シリウスに名前を呼ばれ、ハリーは顔をあげた。
シリウスが優しく微笑んだ。
「シリウス…　僕、ごめんなさい…。本当にごめんなさい！」
ハリーはやっとの思いで、それだけを口にした。
「ハリー、君は何も悪くないよ。それよりも、君を最後まで守れなくてすまない」
「シリウス…」
「『聖夜にスノー・エンジェルが奇跡を起こしてくれる』という言い伝えがあったのを思い出してね。　成功するかはわからなかったが、やってみたんだ。結果はうまくいったようだね」
「それじゃあ、あの夢はシリウスが…？」
シリウスはうなずいた。
「ハリー、君に渡したいものがあるんだ。こっちへ来てくれないか？」
ハリーは少しずつシリウスの方へ歩みを進めていく。
そしてやっと、彼の前にたどり着いた。
「手を出してごらん」
シリウスにそういわれ、ハリーは彼の前で手を開く。
シリウスは目を閉じて意識を集中させると、呪文を唱え始めた。
２人の間に白い光が浮かび上がり、そして消えた。

光が消えたとき、ハリーの手のひらにはチェーンのついた指輪が乗っていた。　指輪には、ブラック家の紋様が彫られている。
「これ…」
「これから先、ヴォルデモートとの戦いはますます過酷になるだろう。そのためのお守りだよ。君がはめるにはサイズが大きいだろうから、チェーンをつけておいたんだ。これには魔法をかけてある。きっと何かの役に立つはずだ。　本当はあの魔法省での戦いのときに君に渡すつもりだったが、渡せなくなってしまったからね」
「ありがとう。シリウス」
　そのとき、スノー・エンジェルがやってきて　彼の周りを囲む。
　シリウスを元いた場所へ誘うように。
　シリウスは、再びアーチへと背を向けて歩き出した。
「シリウス！」
「スノー・エンジェルが奇跡を起こせるのは今夜限りだ」
「そんな…」
　ハリーは下を向いて必死に涙をこらえた。
　そんなハリーに、シリウスは優しく語りかける。
「悲しまないでくれ、ハリー。　たとえ姿が見えなくても、私はいつでも君のそばにいる。君をずっと見守っているよ」
　そういい残して、シリウスはアーチの中へと姿を消した。
「シリウス！！」
　ハリーの叫びが神秘部内にこだました。

「ハリー」
　ルーピンがそっと声をかけた。
　ハリーは涙をぬぐうと、彼を見上げた。
「大丈夫です。シリウスのためにも、これから先の戦いに備えます」
　ハリーはそういって、指輪のチェーンをはずし　自分の首にかけた。
「私たちも、できる限り　君のフォローをするよ。　さあ、帰ろう」

「はい」

ハリーはルーピンと家路への道を急いだ。

END

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7462f/

雪の奇跡

2010年10月8日15時36分発行